

神伝は「花祭」から 構造家・佐々木睦朗

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント

■北設楽郡東栄町

国の重要民族文化財に指定されている三河（愛知県）に伝わる「花祭」。構造家の佐々木睦朗さんが、生まれて10歳まで育ったところとその祭りの続いている地域のひとつ、愛知県北設楽郡東栄町だ。インタビューの冒頭に聞いて思い出が蘇るのは、これまで観た中で一番深く心に残っているのがその祭りだから。「むっちゃん」が、稚児踊りをしている姿も見えます。今、その地域に作品を展示している別邸が資料館となっていて、建築家・磯崎新さんと共働したカタル国立コンベンションセンターの巨大模型も展示されている。アーカイブは国立近現代建築資料館で主任調査官の桐原武志さんに協力してもらっているそう。「現役のうちからすごいです」と覇志堂はお祭りより資料館見学に惹かれていたようだ。

親しい友人関係で協働してきた、建築家・難波和彦さんが「天才ですよ」と漏らした。法政大学の教授を退任した時に行われた連続講義をまとめた『構造・構築・建築 佐々木睦朗の構造ヴィジョン』（LIXIL出版 2017年）の中に収録されている「佐々木睦朗試論」を読むとその真意が見えるよう。構造家としての一般的な括りでは収まらない天賦の才。建築家の妹島和世さんも母方が巫女の家系というから、芸術と技術が両翼の建築には神からの授かりもあるのかもしれない。

■キャンデラとガウディ

時には誤解を招くかもしれない率直な言葉が、逆に人と人との出会いを発展させてくれることがある。佐々木先生が最も尊敬する構造家のフェリックス・キャンデラ（1910-1997年）との出会いもそうだった。スペインからメキシコへ亡命し、歴史的仕事をしたキャンデラには、建築家の齋藤裕さんの縁で会うことができた。そのときに、ガウディ論になり、安易に装飾

的と発言してキャンデラに怒られたそうだ。ショックですぐスペインに飛んで、ガウディの凄さを知りガウディ研究では第一人者になる。それが代表作の「せんだいメディアテーク」（設計／伊東豊雄）につながるまでの話は佐々木先生の十八番なのです。異論に反発するのではなく、素直に立ち向かえる先生の気質です。

時系列で、どのくらいの仕事をしてきたか一覧表を見せていただくと、実施で256作品ある。建築家は、日本を代表する方々ばかりだが、複数回となると限られる。「感覚や思考が共有できない人とはやっていけない。美学と論理が一致していること。力学の原理から補助線を創出し、自分のなかから湧き出るもので作る」本気になると早いといいます。「この20年余りは偏っていますねえ」と笑い溢れる。現在抱えているプロジェクトでは、ダントツでSANAA（妹島和世、西沢立衛）。未来に向けて期待できる建築家との仕事は楽しそうです。

■伝えたいこと

華道小原流の一級家元教授。「構造家だから骨格の造り方が上手くて」と謙遜するが、短時間で見事に生ける特異な存在だったが、同門に兜を脱ぐセンスの持ち主がいた。結婚前の夫人がその人というから素敵なお話です。小唄もセミプロ級らしい佐々木さんは、なかなか乙な方です。

生け花に欠かせないのが、「矯(た)める」こと。枝を曲げたり、まっすぐにしたりの他に、悪い性質や癖を直す、目を据えて見る、狙いをつける、の意味がある。作品や著書、論文で、未来の構造界を担っていく若い人たちを牽引する存在の一言は深い。若い人には技術論より、「よい仲間と出会うこと」を伝え、「何人同志をつくることができるか」と問うのである。

